

VIII. 福祉の舞台づくりに取り組む住民の意識

1. はじめに

地域の特性の中には当然のように人間が存在していなければならない。つまり人間不在の地域などといったものは、理念上存在しないということである。しかし、実際人々が存しても住民の意識なり、その意識に伴なういわば住民の求心的な協働ないしは相互扶助の行動の欠落をみるのが少なくない事も事実である。

前回我々は西陣の地域研究の一コマとして、住民相互の扶助的関係を福祉舞台の特徴としてそれを探り、その舞台の構造的特徴について何程か迫ってみた。

まさにこの協働や相互扶助は住民を一つにまとめようとする相互肯定的関係として特徴づけている。しかも前者は一定の共通の関心にもとづいて為される協力行為だし、後者のそれは自己の益にとどまらず相手の幸せを十分に考慮に

入れて、とくに意識的かつ意図的な協力行為を指していると考ええる。従って今回は地域を柏野に限定しながらも、あくまでも住民の相互肯定的関係を視座に入れながら、西陣、いわば西陣たらしめている特徴の一つ、住民の福祉観のある側面、つまり協働もしくは相互扶助の協力行為を調査の結果から読み込んで編者の意図にそう何らかのストーリー性を補完してゆきたいと思う。

尚、本来なら変数間の相関々係々数などを駆使して統計的数量化（数量化第3類）を求めて論ずべきところ今回は十分な解析をしていないので、専らクロス分析などの手法より一定読み込んだものである事をことわっておきたい。

とりあえず意識、生活、つきあいの3項目について記述する。

2. 人びとの意識

(1) 「よそ者」意識

住民の生活意識を規定するものの一つに「よそ者意識」があらうかと思うが、それは言うまでもなく、内と外の意識、換言すればステータス・シンボルの一指標と考えてよいし、更には準拠集団のそれと解しても良い。前者は地域内での一人前、即ち身のおきどころであるか否か、さらには後者のそれは“背身の狭さ”と大いに関係して来ようとおもう。

ところで調査の結果はどうだろうか。さしずめ地域のマトに焦った柏野では対^{コントロールグループ}照地の西陣と比べて「よそ者」意識がきわめて少ないことが分かるのではなからうか。しかもその割合は西陣では凡そ8割強の者が何らかの「よそ者」意識についての規準を持つものに対して、柏野住区の住民は凡そ、その半分の4割程度の者

しか意識していないことがこの統計の結果から分かるのである。

では尚、4割近くの者の意識する「よそ者」の内容だが、もう少しふみ込んでみることにしよう。まず、居住期間、持ち家、借家などの住宅の所有、さらには表通りや路地などの住宅の位置など3つの指標からくるステータス・シンボルなり準拠集団なりを推しはかってみると、まさに柏野たるものが出て来ていると思う。各々、2分の1から3分の1ほど西陣住民より意識が低いこと、また大きな意識のズレを持つものの内には「表通り」や「路地」などの家の位置にあるもので西陣の3分1、さらに居住期間や所有形態では2分の1となっており、総じて、住民間に「よそ者意識」がそう強く意識されていないことが分かる。また住民相互の結合がや

テ型よりむしろヨコ型指向、つまり住民相互の友情(つきあい)による結びつきを特徴とする地域と何が得る指標ではなかろうか。更に見方を変えれば組織化された住民 (oriented neighborhood) と言っても決して過言ではあるまい。

(四) しきたり意識

次に我々は、住民意識の二つ目の指標として地域意識の外在性や拘束性として作用している「しきたり」について述べる。これは唯単に住民の生活意識と言うよりも優れて地域生活の場における人間関係のあり方という点に、独自の視点を求める社会学は集団生活の中で人々はどうのような意識や感情、態度をもってお互いに共同・協力し合ったり、反面、どのような仕方で反発したり、互いに分離・対立・斗争の関係におかれているかが求められねばならないとすれば、この地域の住人たちの相互の関係が成り立つ様々な条件やプロセスを分析したり、同時に地域におのずから形成される社会的な所産、たとえば慣習、道徳、規範、福祉等々の社会意識を、さらにそれらが逆に人々の関係や行動を規定しているかといった社会学の主題を捉えるのに暮らしの不満や要求を為政者に求めているとする意見、それに第4の意見は、地域を生活の拠りどころとして互いに協力して、住みやすい地域にどう心がけるかという項目から一つ選んでもらった。結果は柏野とその対照群として選んだ西陣住区とは全く変化は見られなかった。尚、頻度の多い解答では1と4の地域のしきたりを尊重し、人の和を大切にするという意見と、自ら地域を互いに協力して良くするよう心がける意見が同程度で、前者は各々全体の3～4割で対照地域の西陣との間に余り差は見られない。次いで、関心や愛着なしとする主たる研究の主題とする筆者らは「しきたり」に殊の他興味を寄せたところである。

ところで今回の調査でも、また先きの第2次、3次の調査同様、地域内のしきたりの有無を問うているが、それによると結果に明らかに対照地の西陣と意識構造の違いが見られる。例えば西陣(地域)には仕事のきまりやしきたりが根強く残っているかを尋ねてみると、西陣でしきたり「有」とする肯定する者の割合が4割(40.1

%)、「無」2割弱(23%)に対して、柏野地域でのそれは「有」が2割、「無」が3割弱とその主位を逆転している。茲に両地域の意識の差違が現われているが、あえて言えば柏野では西陣に比べて「有」とする者半減、尚、しきたりなど「無」とする者、柏野では3割弱もあり、地域内のしきたりなどそう強く感じていない地域と言ってもよからう。むしろ第一に分析した「よそ者」の項でみた傾向は、この「しきたり」の規制を指標とするものでは逆に、しきたりなど強く感じない集団のタテより個をヨコに重が置かれた地域といえないだろうか。むしろ言葉を換えれば、ときに集団より個が優先するようないわゆるバラバラな地域ではないかとも察するがどうだろうか。今回、茲では問題を提起するに止めるが、総括的に言えば統計の結果は西陣の対立をさけ、協力と分かち合いの住民意識が7割(74%)、僅かに低目に出ているが柏野でも6割強(68%)とこの数字は地域の特徴を言い得ているようにも思える。

(五) くらし方

ところで本調査では、とくに住民の暮らし方等々から推察することにするが、さし当り、くらし方から述べる。これは4つの解答群より1つ選んでもらう手法を取り入れたものだが、その一は、地域の生活やしきたりについて出来るだけ従い、さらに人々の和が大切だという意見である。二つは、地域に生活してはいるが、さして関心や愛着など持たず地域の指導者にまかせるという意見、三は、市民の権利として生活している者が柏野で1割程度おり、とくに、目ざめた権利意識をもって住民として生活上の不満や要求は全て為政者に要求していくという者が4%となっており、総じて言えることは、(1)・(4)のポジティブな意見を合計すると7割強の者は地域のしきたりを重視し、自らすすんで積極的協力して住みやすいよう心がけるという住民意識がこの一つの特徴を作っている。但し、住民の特徴を知る上で忘れてならないのは、むしろ協力や分かち合うことよりむしろ対立を止むなしとする者の存在が柏野で数%高ーガナイズド・ニイバアとして判断していい数字ではあるまいか。

更に求める暮らし方の第二の意識は第2と5次で調査した個人調査の項目より自身の生活についての考え方から拾ってみる。それによると、両地域に多少の違いが出て来ていることに気がつく。例えば西陣住区では「清く正しく」が約半数49%を占め、次いで「金より文化を」という意見の持ち主が2割、そして「働いて財産をつくる」という者が1割弱と続く。それに対して柏野では首位の「清く正しく」は西陣とが順位は変らぬが割合が5割弱（54%）と僅だが差を見せている。だが次位には僅な差だが逆転がみられる。つまり柏野住区では「働いて財を作る」が2位に、そして「金より文化」生活をというものがそれに続く、これはむしろ働いて財を作るは両地域とも13%台で変わらず、従ってまた「金より文化」に柏野が西陣の半分のところが目立つところである。つまり地域にはひたすら働くことで直接役に立たないが、自らを「清く正しく生きる」ことがこの地域の軽いしきたりになって自他を規制していること。更には、この生き方（しきたり）に準じた規制が個人々人を拘束している事が伺かがわれる。

加えて、それらの暮らし方が地域内で生かされているか否かを尋ねたのが第2.5次の個人調査だが、生かされていると肯定する者は両域ともに2割、さらにそう努力している者の割合が西陣52%に対して、柏野43%と10%近く差がついている。以上合わせてもポジティブな意識の持ち主は西陣の73%に対して柏野63%とややポジティブな意見の低さが目立っている。従って言うまでもなく考え方がうまく生かされていないとする者の割合が西陣15%、柏野17%とあり、幾分、柏野で多く、また少々気になるのが無回答層だが、柏野で2割近く（西陣の倍ほど高い）あるのは何故だろうか。むしろ態度保留を拒定的態度と見れば柏野の「民主化地域」（オーガナイズド ニーバア）の飾いは崩れ、筆者の言う多様性即バラバラ説に落ち着くのではなからうか一度検討を要する数値であろう。さしづめ、住民の地域の充足度なり準拠に関する限り、地域の解体が産業の空洞化にありスベリ現象を呈しているとは考えられない。

先に指摘したヨコの関係をネットワークを中

心にした関係が福祉追求地域としてのコミュニティづくりに特徴あるいわゆる西陣地域となるであろう。

むしろ、マイナスを補完するような営なみがこれらの地域には醸成されていると言っても過言ではあるまい。例えば考え方を誰と一緒に実現させようとしているかについて、調査結果は西陣では「家族と」に4割、続いて「友人・知人と」が2割強（25%）、一人で（2割弱）に対して、柏野住区の人々の活動は、家族が首位を占めている。これは西陣と比べて1割程も低い。むしろ「家族と」がおさえられて代わって「友人・知人と」「職場の人・学校の人と」「となり近所と」と言った仲間と協力して実現させようとしている向きがみられ、それが4割弱（44%）にもなっている。まさに柏野たる特徴のヨコ関係は家族より仲間、隣人に重きを置いているのが分かるであろう。

（二）住みつづけの意識

地域への定住指向として、住み続けいかんについてたずねてみた。それによると西陣、柏野ともに継続して住み続けたいとする意見の持ち主が6割、また反対につよく移ることを希望する者が2割、そして分らないもの1割弱となっている。

では定住指向の内訳だが、比較的多い理由の内には、両域とも住み慣が半数を占めている。さらに買い物の利便、家や土地があるに続き、僅かながら地域の人間関係の良さを挙げている。若干西陣と異なる点は西陣の自然環境の良さを挙げる者が4分の1いるのに、柏野ではこの理由による定住は極度に低く（1.4%）、むしろ、その逆は「仕事」で機会の多いのは西陣で3割（32%）なのに柏野では2割強（28%）と機会に恵まれていない事を理由に挙げる者の優勢がみられる。更に福祉や教育それに医療などに関する社会資源故に定住したいとする住民は西陣で16.2%に対して柏野では僅かに数%と、柏野の社会資源の不足を単的に物語っている数字と言えよう。しかしながら、それらを補うものとして両域ともに地域での人間関係を挙げているが13~14%いる。

また、よそに移りたいとつよく希望する者の

理由についてたずねてみたが、両域とも上位は住宅事情(悪)を挙げている。割合にして凡そ半数を占めている。その他、比較的多い理由は騒音だが西陣29%に対して、柏野では36.8%と有意の差で騒音が気になっている事情が示している。特に興味あることは移りたい理由に西陣が地域の人間関係(2割)の悪さを挙げている。が

然し他方柏野ではその理由が十数%とダウンを見せ、両域の差を出している。更にもう一つ挙げれば、親族がいないから移りたいと希望する住民であるが、西陣では11%、柏野3%とこれ又差が出ており、改めて柏野の地域的結束が近隣の友人たちによっていることがはっきりするデータとなるであろう。

3. 人々の生活

(イ) 消費行動

人びとの第二準拠を引き出すものは、人々の行動である。

まずとりあえず、彼らの消費生活における行動から、その充足度並びに自主度、接触のあり方等々について、また地域への準拠について分析を進めることにする。

ところで第一に求めた消費行動について衣食に若干の違いが生じている。例えば近所、充足指向が特徴のある西陣は全体の(45%)4割強であるのに、柏野では近所での買物は西陣の4分の1の1割程度で、むしろ日用品や食料品であっても近隣の品数のある、値の安いスーパーに買い物に出掛けている様子が伺われる。この辺に普段の近隣のつきあい(しきたり)とは別に良い物を安くという個の主体性からまる個の選択が優先するものが推察されるであろう。とくに衣では西陣住人は中央のデパートに向くのに、柏野では地元の商店街で充足させている者の割合が、西陣の半分の23%という数字からして、西陣のブランド指向より柏野の実用指向が伺われるのであろう。一面、地元(産業)への関心の薄いのに反して消費行動の地元指向というアンビバレントな側面を呈しているものであろう。但し食行動については両地区とも行動に違いがみられない両地域ともに食品添加物に対する安全については気をつけている割合は2割程度で差はない。また、一家団らん、食事等々に工夫するもの共に2割強あり、差なし、唯一差の出たものは忙がしくて手間ひまかけられないとする家庭が西陣では23.4%、柏野ではやや高く26.1%と凡そ4世帯に1世帯の割合で、食事に十分な時間がとれていない事実を伺がわせ

ている。

(ロ) 情報の接触

次で情報行動だが、総じて言えることは情報への接触が両域を比較してみると、西陣の地元の町内行事、行政のうごきを中心としているが、柏野では学区内や町内の行事はもとより、買い物、ファッション、さらにはレジャー等々情報が分散していることが分かる。内でも当然柏野地区の住民の方が接触の点でも情報の手段共に優勢を示している点を指摘できる。内でももっとも多い情報とそれを得る手段との組み合わせをみると、学区や町内の行事を回覧板で知る方法である。西陣120に対して、柏野は倍の217、さらに、市や府の施策の動きでも西陣32に対して、柏野の64と凡そ倍の接触度を特徴としていることなど、特筆すべきであろう。いずれ個のニーズが多様化し分散している様子が伺わられる数字であろう。

(ハ) 生活の困まりごとと問題とその処理法

それでは生活での困まり事とその処理を通してみた両域の違いについて探りを入れてみることにする。両地域共に困まった事なしと解答した者が3割程度いるが、6・7割方の住民は何がしかの生活困難を感じている。それではまず困まり事ワースト5を挙げてみるが、第一に意識構造のはっきりとした違いが指摘できる。西陣住民のワースト5では交通事故の危険をはじめ騒音などの環境の悪さを、さらに日照り、緑が少ない、そして教育環境のわるさを挙げる。それに対して柏野では交通・音に代わり緑や日照りが首位に立つ、続いて車の事故の危険や道路の悪さを挙げ、困まり事の構造の違いが出ていることに気付かれよう。特に柏野の緑の少な

さは西陣の倍近い感情をもっているし、日照りの如きも倍までにはいかぬが相当の差が目立つ。いずれにせよ、西陣地区の環境三悪として交通事故の危険、少ない緑、そして騒音が挙げられているが、全体の6・7割の住民がもつ生活困難はくるしい問題であろう。

それでは、そうした環境三悪について具体的な解決法であるが、その特徴をみておこう。両域共に3割は具体的な方法のないまま過ごしているというのが事実である。唯一の方法は両域

ともに役所に依頼するという住民で全体の2割弱いる。ところが次位が両域で内容を異にしている。西陣では自治会や議員に依頼するという方法を選択するが、柏野では地元の有力者や議員を頼りにして問題解決を求める方法が取られている。但し正規の草の根の解決のための組織づくりや陳情や請願などの行動にでる住民は両域とも7%程度で差がない。それにしても問題がありながら具体的な確たる方法がないのが、むしろ問題と言わねばなるまい。

4. つきあいについて

(イ) 人びとのつきあい

住民の地域内充足の手がかりを知るものとして人々のつきあい(関わり)があろうかと思う。今回はフォーマルな自治会への参加とインフォーマルなつきあい、とくに近所や仲間らのつきあいを中心に記述しておきたいと思う。

まず、フォーマルな町内会への関わりであるが、結果は両地域でさして変化はない、少々目立つのは町内会への参加で、だんだんトップで西陣・柏野ともに8割近く参加がみられる。以下極単に関わりへの頻度が低下する。やや大雑把な見方をすれば、西陣住民の諸団体との接触が柏野に比べて密かつバラついているように思われる。即ち、PTA、婦人会、とも3割近くの住民に接触がみられる。尚、組合、同窓会に4人に1人(26%)の割でつきあいが見られる。以下、老人クラブ、同好会という順になるが、15.6%と1割半程度と下がる。これに対して、柏野はつきあいの頻度が西陣に比べて低いのは先きに述べたが、つきあい方にも若干差が出て来ている。内でも上位町内会、組合、婦人会、PTA、同好会と順位は変わっていないが、その割合が西陣に比べて低い。例えば組合が西陣27%に対して21%と、婦人会、PTAへの参加に柏野の低さが極めて目立つが、前者では10%低い19%、さらに後者では13%低い18%となっており、その低さをよく示していると思う。では特につよくつながりを感じている団体について問うた結果では、両域とも自治会への接触の頻度が若干低い以外は全く変化なしである。さ

しずめ強い関わりを感じている諸団体を列举すればフォーマルな自治会や、青年会、婦人会、老人クラブ、そしてインフォーマルでは同好会や宗教団体となる。割合をみると自治会へのつながりがもっとも強いようだが、西陣46%に対して柏野57%と10%の増がみられる。以下%は変らぬが、同好会、宗教団体が各々1割程度あり、青年会、婦人会、老人クラブの順となり、僅かに8%に治まっている。では何故そこに強いつながりを感じずのか理由を問うてみると以下のようなになる。即ち、両域とも全く変化なく、義務、人とのつきあいがほしい、身につく等に集中し、各々、27、26、そして「身につく」では2割と4～5人に1人の割で、つよいつながりを見せている。推察すればフォーマルな自治会へは義務が、その他のインフォーマルな関係への諸団体には人との接触を求める者や、同好会や宗教団体のような身につく等々と、つきあいとつきあい方に使いわけが出ている興味ある数字であろう。

では義務であり、大方個人調査では7・8割参加がみられる自治会について、その行事への参加を調べてみるとどうなるだろうか。解答群より3つのグループ即ち参加の中心的役割を果たしている会合・行事に必ず参加、いわゆる積極型、たまに参加する程度の中間型、そして会費を治めているだけで関心なしとするグループ、無関型に分けてみると両域とも変わりはない割合の順位からすると、中間型で両地域とも45%、次いで積極型28.9%、そして無関心型が

残り2割を占めている。ざあっと見て義務とは言え自治会の会合や行事につよいつながりを持って参上している者が8割方いる数字であり、地域自治の健全性を物語っていると言える。ただし2割近くの無関心層が少々気になるが、いづれ年令や居住年月、ライフステージによるクロスを試行するので、その結果ともつき合わせて検討したい問題であり、今2割の無関心層を以って地域連体性の空洞化を云々するのには時期尚早と言えるのではないか。しかし、どの層からの地域（心理的関わり）離なれかは見守って行かねばなるまい重要なポイントであることは間違いあるまい。とは言え自治会の存在をめぐる分析になると、当然のここのように8割方は自治会の存在をつよく認めている結果に治まる。むしろそれを拒定する意見の持ち主は両域ともに僅かで数%にとどまる。さらにその理由は何か、その首頭に挙げた理由は町内のまとまりや、その親睦の為があがり7割近くを占めている。ところが、特筆すべき事柄には自治会の存在をつよく感じていない数%の中には、その義理人情がかなわない、もっと自由にしてほしいといった意見の持ち主が目立って両域ともにいることも事実である。従ってまた、先程の問題とも合わせ各属性とのクロスを通じてディテールな検討が是非とも必要となろう。例えば2.5次の個人調査のゴミ回収の項目から分かるように、ゴミ回収後掃除について知っている者、西陣では約半数、柏野ではその半分の23%、むしろ知らないとする住民が西陣で3割柏野で25%いる。一般に西陣地域の悪さが目立つが両域ともに自治会の連絡事項が末端に徹底していない面のある事を如実に物語ってはいないだろうか。さらに問題は、今後の高令化や情報社会の中で、自治会が単に寄付集めや労働奉仕（下請け機関）から脱却して、連絡・相合互助など本来の地縁関わりあいをネットワークにした福祉追求の地域づくりに大きく後退したブラックホームを露呈しているとも見れば見られるような数字であることも提起しておきたい。

(iv) 具体的なつきあい

(a) つきあいの相手 では次ぎに具体的なつきあいについて記述する。日頃親しくつきあ

ている特定の3人を選んでもらった。そうすると3人の内2人までは近隣もしくは親族間とのつきあいが主であることが分かった。残る1人は西陣で同業者に柏野に同窓となっている。総じて両地区に多少の差が見られる。例えば西陣・柏野とも近隣とのつきあいでは3・4割と余り差は出てこない。しかし第2位の親族では、柏野は西陣に比べ若干のつきあいの頻度の如く差がみられ、低いことに注目される。尚3位は西陣では同窓・同業と続くが、柏野では同業者らとのつきあいに集中してしまう。但し少々気になるのは解答の不明者である。西陣の不明者0に対して、柏野では何故か2割から4割もいる。日頃親しくおつきあいしている仲間が柏野では少ないことは事実のようだ。

(b) 電話による相手 次いで彼らとの電話連絡についてみると両域で変った差の出たものはない。接触の順位をみると、第1は仕事上のごとで仲間にかける、かかるといったビジネスによるものが4割ある。続いて親せき、友人となるが、親せきが3割、そして残り2割が友人・仲間ということになる。しかもその頻度は週に数回がもっとも多く5～6割方を占めている。

(c) さらにつきあい行動として贈答の有無をチェックしてみたが、両域ともにつきあいとして互いに贈答品の交換慣行をしている者が7割強あり、若干、贈答慣行のない者が西陣15%に対して柏野では2割近くの者がいる。では贈答の交換慣行のある者から、いかなる関係の者かまたその割合などを調らべてみる。ここでは仮りに最も多い5人以内に焦ってみたが、総じて柏野の贈答慣行の割合が西陣に比べ高い。これは関わりの濃密さを計るものと思うが、近隣の者への贈答が9割にものぼっている。続いて比較的高いのは同窓、友人のこれまた9割、さらに少々低め（8割強）だが上司、親などと続き、他人にもものを送りとどけるといったものが、これらの地域では半ば慣行化しているつきあいである。

(d) 近隣への贈答品交換といった事は当然近隣とのつきあいを規制してくると思われるが、では、その近所つきあいについて次ぎに見てこう。そのつきあい方はあいさつ程度から茶の

みに呼ばれたり呼んだりするつきあい、さらには留守を頼んだり、時には金品のかしかりまであるが、茲ではこれらの4つに限ってみることにする。すると4つのつきあいとも両域での差は出てこなかった。少々細かく説明すると、柏野ではあいさつを交わす相手が6軒から20軒で4割強、さらになんと30軒以上が4割にも上っている。いかに近隣住区が顔見知りであるかが伺かがわれる。とは言え具体的に茶に呼んだり呼んでもらったりする相手は5軒以内にとどまっており、「向う三軒両隣り」の感がする。また留守のお願いの出来る相手が5軒以内で96%と、さらに金銭のかしかりに至っても同率の95%の者が4・5軒は持っている計算になる。言ってみれば日常的とは言え、留守時のお願いや金銭の用立てに近隣住区の近密なつきあいになっていることが分かる。

では更にその関係が日常的でない非日常的な場合、例えば病気、事故、金銭の問題が生じた場合の処理方について探ってみよう。ところでそうした非日常的な困まり事であった場合、頼りになった人々が誰れかをみることにした。結果は家族、とくに子供の進学、就職、結婚などに相談にのってもらえたとし、加えて具体的な援助が得られた相手は、両域で違いはない。もっとも力になった相手は両地区とも親族である。割合にして4割がこれに占められている。続いて友人・近隣の者という順位になるが、各々割合は両地区とも2割強、但し「友人で」は西陣で1割程度に対し、柏野では倍の5分の1人の

割りで頼りになる相手に選んでいる。とは言え反面柏野での頼りになる人がいないと答えた者が1割もいる。この傾向は、家族の病気や事故時の助け合いにも言える。いずれ頼れる者は親族である。近くの人であり、友人である。但し柏野での近隣の者の割が西陣に比べ10%多い2割もいるのもこの地域の一つの特徴ではないだろうか。また友への依存も西陣の3倍近くになり、西陣の親族依存型に対比し柏野の友人・近隣の仲間が抽出してくるであろう。

もち論、金銭についてもこれらの構造の特徴が言えると思うが、ここでも西陣の親族依存型に集中するのに、柏野では親族に代わり友人や近隣の者の割が高い。とくに近隣の金銭のかしかりは、前者では西陣の倍近い割を示し、後者では3倍もの依存がみられる。むしろ柏野では病気・事故などの相談相手には近隣の住人が、また、金銭のかしかりでは友人の果たす役割が高く評価できる特徴ある傾向である。

(e) 最後に、前の依りになる準行動として、神社仏閣への関わりや接触をみておこうと思う。この神仏はむろん、具体的な相談や援助は得られるものではないが、心の支えとして大きな役割を果たしている事は事実である。結果は両域とも神さまにと答えた者は4割もいる。又仏に願う事をする者が2割、実に6割近くの者が困った時の神だのみではないが神仏に帰依して、たしか心の拠りどころとしている事は拒めない。

5. おわりにあたり

おわりに際して、若干の福祉舞台を作っている地域の特徴をコメントしておきたい。まずこの骨子とするところは、小集団論から導かれてきた一種の社会的地位であるランクを用いたコメントである。承知の通りこのランクは、フォーマルな社会的な地位^{ステイタス}ではなく、インフォーマルな集団成員間に生起するセンチメンターに訴えたある人物の地位(存在の上下)を評価するものである。その内容は、集団内で人々は基準に合致した行為をすればする程その人物のラ

ンクは高くなり、逆に基準からいつ脱した行為をとればランクは低くなるという仮説である。しかもこれを支えるサブの要因として、(1)メンバー間のランクはリーダーの意見に大きなウェイトをもつ、(2)ランクの高い人物は直接間接接触を求めようとする人の数が多くなる、(3)ランクの高い人物は自分の方から接触を求めようとする相手の数が増す、(4)ランクの近い人同志の接触がひんばんになる、(5)自分より高いランクの人々に接する場合、もっとも近いランクの人

を通じて接近する，という仮説が証明されるであらう。

さらには亦，先きに求めた住民の相互肯定的関係に優位がみられる結果になるであらう。

確かにこの相互肯定関係に対して，拒定的な関係をも合わせ論じねばならないが，今回はそれについて分析する余裕がなかったので，今後の問題として残しておきたい。

ともあれこの地は友人や親族のようなプライ

スリー指向の強い町衆からの連帯が，協働や相互扶助の行為を作っていることは明らかにされたと言っていいであろう。この人間の人間に対する行為が，独特の福祉舞台の住民の柱を形成していると解してよかろう。

さらにこの地域の情報の流れのうちに，隣り組という最小の協働と相互扶助のバッチワークのシステムが存在していると解せよう。

(山口信治)

